

## 研究ノート

# 非文字としての文字

—— 60 年代学生運動から考える意味という問題 ——

ロペスハラ・サンティアゴ

Lopez Jara SANTIAGO

### 1 はじめに

新左翼の発生（1958 年）から連合赤軍山岳ベース事件（1972 年）の真実が究明されるまでの日本における 60 年代学生運動の研究は、文字となっているビラやミニコミとともに、非文字に属するイメージ（画像、動画）をも扱っている、それ故、研究において非文字という概念は必要で欠かせないものである。文字も非文字も記号であり、両方から発生する意味を説明できる意味論的な分析が必要となっている。しかし、どうしてそうになっているのかを論じる前に、この研究ノートを理解するのに学生運動の基礎知識は必要不可欠であることから、1946 年から 60 年代の終わりまでの運動の歩みを簡略に述べさせていただきたい。

#### 1.1 60 年代の終わりまで学生運動の歩み

戦場から帰ったばかりの学生は軍国主義を唱えていた当局を追放し、自治会の展開を求めた。日本共産党は軍国主義と対立した唯一のグループと考えられ、評判は高かった。刑務所から解放された徳田球一と宮本顕二、1930 年代の亡命以降中国とソ連で活躍した野坂参三（1946 年 1 月、中国から帰国）らは日本共産党の「三巨頭」となった。民衆の支持を得た日本共産党は「32 年テーゼ」という講座派の分析に基づいた「占領下革命論」を打ち出した。「占領下革命論」によると、占領軍は解放軍であり、日本はアメリカ帝国主義に対する特殊な従属国となりつつあるとの解釈であった。

1946 年 2 月、日本共産青年同盟設立後、日本共産党系学生運動は学生協議会を作り、全国の運動を統一しようとした。1947 年 2 月 1 日ゼネスト禁止のショ

ックは東京大学細胞に危機をもたらした。同年 3 月 16 日の会議で細胞のメンバーだった渡邊恒雄は日本共産党に無批判だったメンバーを批判して、細胞の強制的解散（12 月 16 日）までリーダーシップをとり、主体性を討論した。

1948 年、学費値上げ反対学生ゼネストが実施され、値上げは一時的に中止となった。同年 9 月に全日本学生自治会総連合（全学連）が誕生し、占領の逆コースが始まる時期に活動を始めた。逆コースの開始に伴って、共産党内部の対立は徐々に表面化した。1950 年 1 月 6 日のコミンフォルム機関紙と 7 日の『ブラウダ』に、占領下革命論を厳しく批判する「日本の情勢について」が掲載された。日本向けモスクワラジオも占領下革命論の批判を繰り返し放送した。コミンフォルムの批判は潜在していた日本共産党内部の対立を表面化させるに至った。「占領下革命論・平和革命論」の誤謬は党の誤りではなく、野坂個人の誤りであると第 18 回中央委員会が決議したが、この動きは党内の対立を止められなかった。

宮本顕治のグループ（国際派）はコミンフォルムの批判をそのまま受け止めて、所感派と対立した。第 19 回中央委員会総会で徳田球一は分裂主義者を非難し、党の官僚主義を克服しなければならないと述べ、50 年テーゼと呼ばれた徳田草案を発表した。

朝鮮戦争が勃発する直前の 1950 年 6 月 6 日、占領連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーは共産党中央委員を公職追放した。このレッドパージの結果の一つとして、日本共産党内部の対立はさらに激しくなり、党は分裂した。徳田球一は中国に亡命し、第 4 回全国協議会（1951 年 2 月 23 日）で武装闘争を実施すべきであると述べた。国際派は全国統一委員会を作っ

たが、所感派の臨時中央指導部はコミンフォルムによって唯一正当な日本共産党として認められた。国際派はコミンフォルムの決定を認めず、徳田球一が提案した武装蜂起路線の正しさを認めながら、一方で時期尚早の挑発性を持つ方針であると非難した。

全学連も国際派と所感派に分かれて、国際派は「第二全学連」の結成を呼びかけた。全学連国際派の指導者だった武井昭夫（全学連委員長）は3月に中央委員会へ意見書（『全学連意見書』）として同年10月に出版された）を提出した。この意見書は吉田政府の打倒を求めた所感派を批判し、「帝国主義そのものに対する直接的闘争を展開し、これを打倒する」と主張するものであった。所感派は東大細胞・全学連中央グループを解散させ、全学連内部の対立はさらに悪化した。

日本共産党の第5回全国協議会（1952年1月）で所感派が提案した武装方針は党の方針となった。中国共産党の毛沢東路線から倣い、農村から闘争を展開し、都市部へ解放闘争を広めようとした。所感派系の学生は武装闘争に参加した。1952年3月に、武井昭夫のグループは罷免され、所感派グループが主流派となった。血のメーデー（1952年5月）の後の全学連第6回大会（1952年6月）では、主流派となっていた学生党員が反主流派同盟員をリンチし、自己批判を要求し、26人を除名した。

武装闘争は成功しなかっただけでなく、日本共産党が人民の支持を失う結果となった。また、破壊活動阻止法が成立し、警察からの抑圧は激しくなり、党の活動はさらに難しくなった。中央委員会は1953年9月21日付の『アカハタ』に『伊藤律処分にに関する声明』を掲載し、共産党の農民運動の最高指導者であった伊藤律をスパイとして除名したと公表した。転向者から農民部長・中央委員・政治局員にまで登りつめた伊藤は「スパイの役割から党の政策をブルジョア的に墜落させた」と弾劾された。

日本共産党は1954年の「1・1決定」、1955年の「1・1方針」と第6回全国協議会（1955年7月）を通じて1950年からの混乱を総括しようとした。臨時中央指導部と統一委員会派両派は、何よりも党を統一することを優先したので、分裂責任と武装闘争方針の総括をせずに済んだ。スターリンの死後、平和共存への道が

開け、平和、独立と民主主義は日本共産党の方針となった。第6回全国協議会で、分裂するに至った責任は中国で亡くなった徳田と徳田がリードした中委多数派にあったと総括された。中央委員会は、第7回の委員会（1955年9月）で学生運動の新しい方針を決めた。決められた方針は過去5年間でやったこととまったく逆の方針であった。多くの学生はこの方針を「大学の自治会室を掃除するだけ七中委イズム」と非難し、1956年から砂川基地拡張反対闘争に参加した。

1957年1月、近畿で、新左翼勢力の母体の一つである日本トロツキスト連盟が発生した。同年12月に名前が変わり、日本革命的共産主義者同盟となった。1958年5月、全学連第11回大会で日本共産党を支持するグループと批判するグループの対立は激しくなった。同年6月、代々木の日本共産党本部で殴り合い事件が起こり、党を批判したグループの指導者たちは除名された。除名された人々は12月に、ブントと呼ばれた新左翼のもう一つの母体である共産主義者同盟を作った。同月の全学連第13回大会ではブントが全学連のリーダーシップをとり、日本共産党支持派を全学連から追い出した。

その後の日本革命的共産主義者同盟と共産主義者同盟のスタイルは異なった。日本革命的共産主義者同盟は建党路線としてサークル集団のような政策をとり、学習会や喫茶店オルグを中心に行うなど何よりも理論を優先した。これに対して「たたかうための党」を対置した。共産主義者同盟はまず日本共産党を代表としたスターリニズムを批判し、マルクスを引用し、トロツキズムからも学び、レーニン主義を復権させようとした。全学連第14回大会（1959年6月）ではブントが全学連委員会から日本革命的共産主義者同盟メンバーを追い出した。同年8月に、日本革命的共産主義者同盟は分裂し、革共同と呼ばれた革命的共産主義者同盟全国委員会が発生した。この二重分裂した学生運動の状態で、安保条約反対闘争が盛んになった。

革共同は、安保改定の位置づけに関しては、ブントと決定的な違いはなかった。ブントは安保闘争を階級闘争の焦点にすえた。革共同は炭労を中心にした反合理化闘争であった「生産点闘争」と学生の「炭労支援」を強調した。ブントがリードした全学連は戦闘的

なスタイルで闘った。新左翼は日本共産党を支持するグループから極左翼冒険主義として非難された。1960年6月15日の大規模なデモでの衝突で樺美智子が殺害され、多くの学生が逮捕された。

安保条約闘争後、新左翼の内部対立はさらに深まり、ブントの解散は余儀なくされた。大学紛争高揚期に活躍する数多くの党派はこの時期に生まれた。居場所がなくなった一部活動家は革共同に入党した。しかし革共同へ移行した旧ブント活動家は活動を継続するために、内容の是非は不問にして、唯一の体系的理論をもつ党派に入党したため、革共同内部の力関係は二重になった。結果として1963年に革共同は分裂し、日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派（革マル派）が発生した。革共同の主流派は中核派と呼ばれるようになった。ブントが体験した運動組織論における「ブント主義」を路線的にもっとも忠実に継承していったのは、後に発生した第二次ブントではなくてこの中核派だった。一方、革共同主義を継承したのは革マル派だった。1964年から、新左翼間の対立は暴力的となり、中核派は早稲田大学で革マル派を襲撃した。ヘルメットを被り、マスクを着けて、ゲバ棒をもつ活動家の姿はこのような党争いで生まれた。

1965年に池田首相がポラリス原子力潜水艦の日本寄港を承諾したため、反対した市民と学生は横須賀で警察と激しく衝突するなど、横須賀闘争は第一次ブントの解散以来初の大規模な闘いとなった。6月28日に社会党は、総評共催の「9・27原潜寄港阻止統一行動」（横須賀で7万명이集結）を開催し、新左翼2000名は開催場所の近くに集まり、約一時間にわたって機動隊と激闘を展開した。ヘルメットを被った活動家のイメージはこの闘いで全国的に注目を集めた。11月11日、東京で2000名のデモがあり、11月12日（入港当日）、学生は日比谷で無届集会を行った後、外務省めざしてデモ行進をし、数度にわたって機動隊と激突した。1965年、早稲田大学闘争、明治大学闘争をはじめとする全国学園闘争の幕は開いた。

1967年からの大学紛争高揚期は、キャンパス外の街頭闘争から、本格的に始まった。10月、二度にわたる羽田闘争と、翌年1月、1週間にわたる佐世保闘争はあきらかに新たな激動の時代を告知するものであ

った。三派全学連がリードした10月8日の、死者を出した羽田闘争はとくに重要だった。しかし街頭闘争の評価をめぐって多くの論争が展開され、結果として党派の再編と分裂は早まった。分裂や党派対立の問題は日本大学闘争と東京大学闘争が始まってからひどくなった。大量の火炎瓶闘争、手製の鉄パイプやボール爆弾で武装した闘争は、1969年1月18～19日の東京大学安田講堂闘争から本格的に始まった。

日本大学闘争と東京大学闘争は表に党派がない参加自由な組織スタイルという全共闘を先駆し、他大学にも普及した。夏休み明けの9月5日、日比谷野外音楽堂において全国全共闘連合結成大会が開催された。この大会では、党派間衝突事件の他、赤軍派が初めて公の場に登場するなどして大会参加者の注目を集めた。この大会後の10月21日国際反戦デーでの暴力のレベルは十数年ぶりに激しいものとなった。1970年安保闘争と沖縄闘争をめぐって党派間対立が深まり、全国全共闘は分裂と解体に向かうことになった。

地下然武装闘争は、71年に入って一段と激しくなった。武装遊撃戦は主として三つの契機が挙げられる。第一は赤軍派中央軍が、「72年蜂起路線」のもとに展開した武装遊撃戦である。第二は中京安保闘争による銃奪取の開始である。第三は、赤軍派による明治公園爆弾闘争を契機にして開始された実行者不明の爆弾闘争の多発である。秋以降に多発した爆弾闘争は、根強い地下水脈を形成し、東アジア反日武装路線などの黒ヘルグループに引き継がれた。この年に、赤軍派と京浜安保闘争派の統合によって連合赤軍が生まれた。連合赤軍山岳ベース事件の真相が究明された1972年は運動の重要な転換点となり、1973年に諸党派の党内闘争は、いくつかの例外を除いて、ほぼ全党派にわたって展開され、組織分裂、除名、離党に見舞われることとなった。

## 2 研究の行き詰まり

### ——登場する意味の問題——

運動には中心となるものが複数あり、時代の変化とともに党派も中央も変わるため研究対象として取り上げにくい。一方、ある事件だけを取り上げようとする

とテーマは狭くなってしまふ。簡単に克服できる状況ではなかったため私の研究は二回ほど大きな行き詰まりに陥った。しかし非文字を考慮する意味論からの分析により行き詰まりを脱し、研究が進められるようになってきている。その理由を分かっていたくために研究の二つの行き詰まりから説明しようと思う。

## 2.1 イデオロギーという行き詰まり

60年安保闘争前後に提出された論文のレベルは高いが、その後の大学紛争高揚期に提起された理論のレベルは高くなかったといわれている（岩崎稔、2002）。大学紛争高揚期の学生は対峙した諸問題を漠然と察知できたものの、それを取り上げ言語化する能力すらなかったといわれている（小熊英二、2009、864～865）。しかし、学問的なレベルが低いといわれる理論は大学紛争時代の学生を動かし、激しい運動の原動力にもなった。

学問的なレベルが高い60年安保闘争時代の理論にも、その後の理論にも基礎となっている前提には複数問題があった。例えば、第一次世界大戦の影響や10月革命後の内戦を無視してロシア革命を説明できるのか、政治警察、収容所、ウクライナの飢餓などを無視してレーニン主義や革命党だけを取り上げてロシア革命を説明して良いのか、などである。どうして東大生や京大生がこのような誤りをしたのか理解できなかったため、問題は理論の前提にあるのではなく、意味となるものにあるのではないかと徐々に考えるようになった。しかし、意味となるものとは何であろうか。

## 2.2 イメージという行き詰まり

大学紛争高揚期に党派が提起した理論は内容が乏しく、学生は取り上げようとしていた問題を言語化する能力がなかったといわれている。一方、貧弱な理論を提起した学生や活動家のイメージと活動は乏しくなかった。むしろ学生が豊富なイメージを見せ、派手で戦闘的な活動を見せた。大学紛争時代の写真や動画で一番目立つのはヘルメットやゲバ棒という装着物である。風俗学では一つの解釈の方法として服装、言葉、行動様式、思想様式などを分析し、あらゆる集団のアイデンティティを研究する（山本明、1986、153）。こ

の風俗学の解釈においてイメージは主に服装を意味し、イメージの研究はこの解釈に則した。

残念ながら今ではそうとはいえないが、大学紛争時代以前の学生は教養あるエリートの象徴だった。現代若者文化が誕生するまで学生は教養あるエリートの象徴だった学生服をキャンパスで着ていたものであったが、1960年代後半から学生は若者のイメージをもつことになった。現代史の転換点として1960年代の重要性がはっきりと浮かび上がってくる。

活動家と学生は完全に同じものではないが、学生運動と重なる場合が多い。活動家のイメージと学生のそれは大学紛争時代までは同じだった。デモ、抗議集会やアジ（扇動）の写真で見られる活動家の姿と、キャンパスの日常生活の写真で見られる学生の姿は非常に似ていた。ところで、私が体験したスペインの学生運動や体制反対運動でも日常生活の姿と紛争中の姿は殆ど変わらなかった。一方、1967年以降になると異なったイメージの活動家と学生の姿が見られるようになった。特に1967年10月羽田闘争から紛争中の活動家のイメージとキャンパスでの日常生活のイメージは大きく異なってくる。

イメージは活動のスタイルと無関係な現象ではない。学生と活動家のイメージが同じ時期と、そうではない時期の、活動スタイルと暴力のレベルは大きく異なる。戦後学生運動をよりよく理解するために、イメージがもたらしたことを研究しなければならない。イメージはただ姿形だけではなく、必ずそれ以外の意味をもつからである。

大学紛争衰退期まで学生運動には逆説的な興味深い現象が生じた。理論のレベルや語彙力が高い時期に運動のイメージが乏しいのに対して、イメージが豊富な時期の方が理論のレベルと語彙力は低いのである。

## 2.3 意味となるもの

二つの行き詰まりを要約しよう。イデオロギーという行き詰まりは理論の基礎となる前提の間違いである。しかしそう簡単にある理論は間違えているとは判断できないし、いうべきではない。まして活動家を動かす力があり、衝突事件の理由にもなったことから、分析すべきなのはむしろ運動における理論の影響に



ついてだろう。把握すべきは論文に書いてある意味がいかんして理解され、解釈されたのか、ということである。しかしまず、意味となるもの、つまり意味はどこから発生するのか、という問題を解決しなければならない。語からなのか、句からなのか、文からなのか。意味はどこから発生するのだろうか。

もう一つの行き詰まりはイメージという非文字の意味である。言語は言葉、単語、文法やボディ・ランゲージだけを指すのではない。人間は何をするにも言語を使うから、言語化できないというのは無意味な表現である。沈黙すら言語活動における大切な部分であるといえる (Antonio Rodriguez Maldonado, 2011)。問題は、あるメッセージを伝えたいときにどの方法を使うのか、ということである。文化や時期によって、方法自体にも意味があり、メッセージの内容によって使うべき方法も変わってくる。60 年安保闘争まで学生が主張していたメッセージはおもに文字で伝わっていた。しかし大学紛争時代の学生が表現しようとしていたメッセージは文字ではなく、非文字で伝わったといえるだろう。当時の学生は文字ではない非文字という方法を使っていたのである。イメージに意味があるとすれば、その意味はどこから発生するのか。服なのか、ヘルメットなのか。

現代の意味論は哲学の言語論的転回から発生したが、この転回は 19 世紀末に発表されたフレーゲの先駆的な理論から始まったといわれている。意味は *reference* (*bedeutung*) と *sense* (*sinn*) という二つの要素から成り立っているとフレーゲが指摘した。20 世紀に入ってから言語学は二回大きな転換を経験した。これはソシュールがもたらした転換と、チョムスキーがもたらした転換である。ソシュールは言語の諸単位の関係が差異対立に基づいて構造をなすことを共時的に解明しようとした。チョムスキーは言語能力の多くが生得的能力に由来し、諸言語の構造に存在する普遍性を追究することが言語学の目標であるとした。ソシュールとチョムスキーは非常に重要な言語学者であるが、フレーゲから盛んになっていた意味の分析を停滞させたとはいわざるを得ない。意味の分析に新しい進展をもたらしたのは、20 世紀後半になって盛んになった語彙分解 (*lexical decomposition*) である (児

玉徳美、2006)。語彙分解から考えれば単語を定義するということはジグソーパズルをするような作業である (Cliff Goddard and Anna Wierzbicka, 2007, 105~124)。ジグソーパズルのピースが変われば定義も変わる。このジグソーパズルのピースはどこから来るのだろうか。可能性は三つあると述べられている (Stefan Engelberg, 2011)。ピースは生得であるか、感覚に基づいているのか、概念的に基づいているか、となる。しかし、生得の視点を立証する心理言語学や神経言語学からの証拠はない上、定義というジグソーパズルのピースはかなり抽象的であるので感覚に基づいているとは言い難いため、概念的な視点は実証されていない。いったい、意味はどこから発生するのだろうか。

### 3 文字の限界

言いたいことは文字で伝えられたら、疲労させる作業である音楽の作曲はしないだろう。

(グスタフ・マーラー)

意味はどこから発生するのかという問題に入る前に、伝達方法として文字の限界を指摘したい。文字は記号であるけれど、意味は記号から発生するのではないし、同じ記号の正しい解釈は一つだけではない。記号である音符を例として考えよう。アルトゥーロ・トスカニーニもヴィルヘルム・フルトヴェングラーもオーケストラを指揮したときに解釈した楽譜は同じだったが、演奏された音楽は大きく異なった。アルトゥーロ・トスカニーニが楽譜を間違えて解釈したのか。間違えたのはヴィルヘルム・フルトヴェングラーだったのか。問題は 20 世紀に最も優れたといわれる指揮者二人にあったのではない。

音を記号化した音符は談話を記号化した文字と違うだろうという人がいるかもしれない。しかし、意味発生の問題から見れば違いは殆どない。音符と文字が表している現象は聴覚で把握できるけれども、音楽と単語が表している現象は音符と文字の限界どころか、聴覚の限界をはるかに超えている。ベートーヴェンは聴覚を失ってから作曲しつづけただけではなく、交響曲第 9 番を作曲できたというのは奇跡ではない。また、

耳に障害がなくてもクラシック音楽になれていない人がプロコフィエフのピアノソナタを聴いた場合、そこにある音楽を聞こえなかったとしても不思議ではない。音楽を媒介として伝えることは記号である音符の限界ばかりでなく、聴覚の限界も超えている。意味の問題に関心を寄せていれば、文字に属する楽譜は非文字に属する音楽と区別して研究するものではない。文字はどうであろうか。

話すとき、歌うときでも、使われるのは言葉だけではない。リズム、イントネーション、沈黙や語順などはい言いたいことを伝えるために使われる。言い換えれば、リズム、イントネーション、沈黙や語順は意味を伝えるために使われる。リズム、イントネーションと沈黙が変われば、単語と語順には変化がなくても、伝えていることは変わる。しかし文字はリズム、イントネーションと沈黙を記号化することができない。ちなみに、ピリオドが表すのは沈黙ではなく、文章の終止のときだけである。

言いたいことを伝えるために話をするとき、視線や姿勢も使われる。視線や姿勢が変われば、リズム、イントネーションと沈黙には変化がなくても、伝えていることは変わる。しかし、文字は視線や姿勢を記号化できない。言語学のポライトネス研究では資料としてよく会話が扱われ、記号化できないこの部分を苦心して文字化しようとしている。しかし、いくら苦勞しても文字化しきれない部分は絶えず残っている。ところで記号化できない部分が伝達方法としてどのぐらい重要なのかを知るにはサイレント映画を見れば分かる。文は言語活動のごく一部にすぎない。

#### 4 意味という問題

—— 意味はどこから発生するのか ——

次に空想の実験をしよう。ある部屋に日本語母語話者とスペイン語母語話者がいる。部屋の真ん中に大きなテーブルがあり、テーブルに100個の品物がある。その中に米1粒がある。日本語母語話者に「米」と書いてある紙を渡すと、米1粒を指した。スペイン語母語話者に「arroz」と書いてある紙を渡すと同じ米1粒を指した。この実験の結果から、「arroz」と「米」

の意味は同じであるといえるのだろうかと考えている間、テレビで「歴史的な凶作の影響で米の値段は100倍になりました」というニュースがスペイン語と日本語で流れていた。このニュースを聞いた日本語母語話者が真っ青になったのに対して、スペイン語母語話者は心配するそぶりもない。「あれっ」と思っているとテレビで「歴史的な凶作の影響で食パンの値段は100倍になりました」というニュースがスペイン語と日本語で流れたが、今回は両者が逆の反応を示した。どうしてだろうか。

もう一つ実験をしよう。前回と同様に日本語母語話者に蕎麦1束を渡して、「これは何ですか」という質問用紙を見せると、日本語母語話者は「ソバ」と書いた。次にスペイン語母語話者に蕎麦1束を渡して、「これは何ですか（スペイン語で）」という質問が書かれた紙を見せると、スペイン語母語話者は「alforón」と書いた。スペイン語と日本語で「蕎麦」という物の意味は同じであるといえるのだろうか。次に、来てくれた全員に「日本一おいしい手打ちソバにも用意してあります。どうぞ遠慮なくお召し上がりください」と言ったところ、日本語母語話者は喜んで食べ始めたのに対して、スペイン語母語話者は憤慨したようで、怒った顔で部屋を出た。どうしてだろうか。

上記の空想実験の結果だけを見たら、「米」と「arroz」という文字の意味は同じであり、「ソバ」と「alforón」という文字の意味は同じであるといえるだろう。しかし、ニュースの反応と「手打ちソバ」の反応も考慮に入れたら、「米」と「arroz」の意味は同じではないし、「ソバ」と「alforón」の意味も同じではないというべきである。つまり、ある文字の指示(reference)は他の文字の指示と同じでも、実際に発生する意味(meaning)は異なる場合がある。その逆もいえる。ある文字の指示は他の文字と異なっても、実際に発生する意味は同じである場合がある。ソバとalforónの指示は同じであるが、意味は同じではない。理由は、言語としてのスペイン語と日本語の違いにあるのではない。日本文化においてソバは人間が食べる食糧であるのに対して、スペイン文化におけるalforónは家畜が食べる餌である。お米とパンの指示は同じではないが、ニュースの反応を見れば、日本文

化において「お米」から発生する意味とスペイン文化において「パン」から発生する意味はかなり似ているといえるだろう。

お米、パンやソバなどは概念ではなく、指で指せる物である。しかし、指で指せる物から発生する意味すら簡単に説明できないし、文化どころか言語応用コミュニティによって実際に発生する意味は異なる。上の空想実験での対象を日本語母語話者とスペイン語母語話者ではなく、日本国内で稲作に関わっている農民と大都会に住んでいるサラリーマンで比べてみたらどの結果になるのかを考えたら分かるだろう。お米の指示は同じでも、実際に発生する意味は違う。60年代学生運動を研究している私はお米、パンやソバなどは資料として扱ってはいない。しかし、指で指す事ができる非文字であるイメージと、物ではないことを表す文字（革命、日和見主義、抑圧、権力など）を資料として扱っている。文字から発生する意味と非文字から発生する意味を説明できる理論は必要で欠かせないものである。

意味論について二つのヴィトゲンシュタイン理論がある。『論理哲学論考』と『哲学的探究』のヴィトゲンシュタインによると言語は現実の世界を記述し、意味はその関係から生じるとのことである。これは「対象とその名前」という言語論である。このような理論は非文字から発生する意味をうまく説明できない。一方、『哲学的探究』における意味発生の理論は別の話である。

『哲学的探究』のヴィトゲンシュタインが提起した言語の定義は<sup>(1)</sup>広い。非文字を無視する狭義の定義に従えば大学紛争時代高揚期の学生は文字ではない方法で表現したことを無視することになり、学生は対峙した諸問題を漠然と察知できたが、それを取り上げ言語化する能力がなかったと言わざるを得ない。非文字も言語に属するとする広義の定義に従えば視点は変わってきて、「言語化できなかった」という狭義の問題はイメージという言語から発生する意味の問題となる。

「或る言語を想定する事は、或る生活の形式を想像することである」とヴィトゲンシュタインは指摘した。生活の様式は広い意味で捉えたい。学生の生活の

様式、先生の生活の様式、活動家の生活の様式、男の生活の様式、独身の生活の様式、など。「学生、先生、男、女、成人、独身などは違う言語を使っていると言いたいのか」と言われたら「はい、そうです」と答える。それぞれ生活の様式には共通点があるからこそお互いに理解できる。あまり共通点がなければ、同じ日本語、同じ単語、同じ文法を使ってもお互いに理解できなくなる。

言語の定義は単語や文法より広いが、文法を無視するわけにはいかない。文法といったら念頭に浮かぶのは文だろう。よって、文にはどのくらいの種類があるのかが問題となる。相手に何をどのように伝えたいかによって使うべき文は違う。これは「言語ゲーム」と呼ばれる。言語ゲームは固定されているのではなく、生活の様式が変化するにつれて、新しい言語ゲームが生まれ、他の言語ゲームが使えなくなり、忘れ去<sup>(2)</sup>れる。文法すら生活の様式に依存しているのである。文無き言語ゲーム、つまり文字の代わりに非文字を扱う言語ゲームも可能である。大学紛争高揚期の場合、学生や活動家は文ではなくその他の方法で何かを表現しようとした。

言語ゲームは断固として与えられたものではない。単語の意味も固定して与えられたものではない。ある単語の意味は、言語ゲームにおけるその単語の使用に<sup>(3)</sup>すぎない。異なる言語ゲームにおける同じ単語の意味は同じではない。<sup>(4)</sup>文は単語で成り立っていて、単語は記号である。イメージは単語ではないが、言語ゲームに使われる記号の一つである。ある記号は言語ゲーム<sup>(5)</sup>の中でしか意味をなさない。要するに記号の意味は言語ゲームによって異なる。二つの理論を対比できない理由はそこにある。

意味は言語ゲームによって異なるといっても、プライベートなものであるとは限らない。ヴィトゲンシュタインはどうしてそうならないのかを説明するためにもっともプライベートな表現であると思われる感覚の表現を例としてあげた。<sup>(6)</sup>感覚の表現とそれによって名づけられたものの結果は、如何にして確立されるのか。換言すれば、感覚表現の意味は如何にして学ぶのか。表現は根源的で自然な表現と結合され、その表現の代わりに使われる。要するに感覚の表現は何も記述

していない。言語ゲームにおける感覚の表現（例えば「痛い！」）は自然な表現（例えば泣き声）を記述しているのではなく、その代わりに使われている。記号は現実の世界にある対象を記述するのではなく、共有生活に基づいた体験されたことを指すだけである。「共有生活に基づいた体験された経験」というのは共有された生活の様式である。意味はプライベートなものではなく、共有されているのである。「いいや、違う」と思う人がいるかもしれない。記号の意味は共有された生活の様式から発生するのではなく、プライベートなものであるとすれば単語は言語ゲームの外にある何かを記述することになる。言い換えれば、意味の発生は「対象とその名前」のモデルになる。このモデルをもっとも深く論考して提起したのは『論理哲学論考』のヴィトゲンシュタインなのである。しかし『哲学的探求』のヴィトゲンシュタインはこのモデルを破壊し、言語の起源を誤解した前提から成り立っていると<sup>(7)</sup>証明した。

研究の行き詰まりを要約しよう。文とイメージに有る意味はどこから発生するのかという難題を解決しなければならなかったが、『哲学的探求』のヴィトゲンシュタインを学ぶことによりこの課題を解決することができた。

- ① 意味は共有した生活の様式から発生する。
- ② 記号（単語やイメージなど）の意味は言語ゲームによって異なる。
- ③ 異なる生活の様式は違う言語ゲームを作る。

## 5 非文字である文字

文字は死んでいる記号にすぎない。共有されている生活の様式から発生し、言語ゲームから解釈して初めて生きている文字となる。意味は非文字である共有した体験からしか発生しない。ある文字の使用を理解するために、共有された生活の様式からどのように解釈されているのか知っておかなければならない。例えば、地震を体験したことがない人にどうやって地震の意味を説明すればよいか。共有した体験を探し、そこから生じる意味を利用して説明するしかない。しかし、結果的に実際に体験した人の言語ゲームにおける

地震の意味と、地震の経験がない人の言語ゲームにおける地震の意味は同じだとはいえない。間違えているというわけではないが、指しているのは違うということだけである。「コミュニケーションは不可能だといっているのか」と言われたら「違う」と答える。我々は皆現代社会のメンバーであるから、ある程度同じ生活の様式を共有している。共通点がなければコミュニケーションは不可能となる。疑問に思う人は次のように考えて欲しい。先史時代の洞窟壁画を描いたのは我々と同じ人間である。描かれているのは間違いなく何らかの記号であり、先史時代人間の言語ゲームに独特な意味があったはずである。しかし、先史時代人間の言語ゲームを可能にした生活の様式はもはや存在しない。まして、我々にとって想像しにくいものである。私達の複数の言語ゲーム（文化や芸術など）におけるあの記号は意味があるが、洞窟壁画を描いた人間にとってどういう意味をもったのか、何を指したのか我々は把握できない。共通点がないのでコミュニケーションが不可能である。残念なことであるが。

「地震」という概念は政治的な思想の前提にあるものではないので、ここではとくに問題はない。党派が提起した思想に大きな問題があるのだが。思想の前提には学生が体験していなかったキー概念（革命、ボルシェビキ、戦争、プロレタリアなど）は数多くあった。言い換えれば学生や活動家は自分達の生活様式とあまり共通点がない生活の様式から生まれた記号をキー概念として使った。読まれた文献におけるあの記号の意味と、学生・活動家が提起した理論における同じ記号の意味は異なっただろう。学生・活動家の知性が足りないというわけではなく、前者と後者の生活の様式が大きく異なるので同じ記号を指すことはなかった。ここにギャップが表れた。このギャップは学生と活動家にとって大きな問題となっただろう。学生と活動家の共有した生活の様式を知らなければこのギャップを研究できない。

あるグループの生活の様式を知るためにそのグループのイメージ資料（写真や動画など）は必要で欠かさない。学生運動の場合、写真や動画などは数多く残っている。私は画像で写されている生活の様式に参加したことはないが、大学生のとき学生運動に参加したこ



とがあるため、その体験をもとにすればある程度画像に見られる生活の様式は想像できるだろう。

## 6 おわりに

### —— 非文字である文字という視点からの 分析の可能性 ——

この研究ノートのおわりに、非文字である文字の視点から新左翼勢力発生の分析を読んでもらいたい。新左翼（日本革命的共産主義者同盟系であれ、ブント系であれ）が使う概念（記号）には、広義の60年代学生運動という時期に、それほど変化はない。言い換えれば、どの資料を分析してもでてくる単語は殆ど変わらない。それらの概念（記号）は新左翼発生以前から使われていて、既成左翼ほど古い。しかしここでは新左翼が使う概念（記号）としての歴史を1958年までしか遡らないことにする。理由はその辺りに新左翼母体、日本革命的共産主義者同盟（1957年12月）と共産主義者同盟（1958年12月）が誕生したからである。

既成左翼に敵対したムードは共産主義者同盟の誕生前から存在していた<sup>(8)</sup>。意味は、どんなものでも、共有した体験からしか発生しない。使われている記号（単語）は変わらなくても、共有した体験が変わったら、その記号の意味は変わる。六全協（日本共産党第6回全国協議会、1955年7月）から既成左翼は変わってしまった。新左翼の発生には、日共と敵対したムードのほか、空白となった概念の新しい意味の探究も関わっていた。新左翼の者が、日本共産党の方針転換を論ずるために全世界共産党運動の歴史を利用した。しかし、引用された歴史（10月革命など）は学生自身の体験ではなかった。以下、この体験されていないにもかかわらず学生運動において大切な役割を演じたものは、疑似体験と称する。この疑似体験の意味は必然的に実際に経験して共有した体験から発生した。どの体験から発生したのかは把握するべき点であろう。資料で引用される概念や出来事は、共有した体験とあまり共通点がないときこそ面白い。これから実際に体験して共有した体験はリアル体験と称する。<sup>(9)</sup>違う資料で同じ過去（疑似体験）が引用されても、共有された体験（リアル体験）の変化によって、実際に発生した意味<sup>(10)</sup>

が異なる。

新左翼の発生には、既成左翼と敵対したムード、意味探究のほか、権威の問題もあった。日本共産党が権威を失った後<sup>(11)</sup>、誰が権威をもつか<sup>(12)</sup>が論争点となった。けれども、権威を失墜したからといって日本共産党と決別することは容易ではなかった。新しい理論が必要となった<sup>(13)</sup>。

ブント発生時期の学生は大衆化大学時代の産物ではなく、まだ教養エリートだった。1950年代末の大学を体験した学生にとってエリートであることは疑似体験ではなく、リアル体験<sup>(14)</sup>だった。前衛党の意味はこのエリートが体験した大学から発生したはずだが、大学で体験したルール、論争方法、闘争方法、学問的な権威などは学問の中だけのものであった。ブントを思想的に支えた理論にこの教養エリートの精神がよく見られる<sup>(15)</sup>。学問的な論文であるかのように書かれており、19世紀中期のイギリスから論じられ、レーニンやトリアッティの論文を引用しながら新しい帝国主義論が提起されている。疑似体験である世界革命は目指すべき目的であるとされ、世界革命を目指さない組織は日和見主義、改良主義であると非難される<sup>(16)</sup>。当時の世界革命の意味はリアル体験から発生したのだろうか。学問の世界に意義があっても学問ではない世界に意味があるとは限らない。リアル体験が欠如したこの概念は意味がない記号となり、行動の原動力となっただろう。意味の探究は新左翼を発生させた背景だけではなく、行動の原動力にもなった。

新左翼運動の始まりであるにもかかわらず、新左翼運動を発展させた日本革命的共産主義者同盟は批判の対象となった<sup>(17)</sup>。前述したとおり、全学連第14回大会（1959年6月）はブントと日本革命的共産主義者同盟の対立の場となり、日本革命的共産主義者同盟は全学連委員会から追い出された。しかし、安保改定の位置づけに関して決定的な違いはなかった。同年8月に、日本革命的共産主義者同盟は分裂し、革共同が発生した。

ブントから批判された革共同は、国会突入闘争（11月27日）を取り上げて共産主義者同盟を厳しく非難した<sup>(18)</sup>。ブントにとってこの国会突入闘争は重要なリアル体験となった<sup>(19)</sup>。疑似体験の存在（実際に起こったの

か、どのように起こったか、など）や性格（分析、総括など）について議論の余地はあるけれど、リアル体験<sup>(20)</sup>の存在は簡単に否定できない。革共同は国会突入闘争の存在を議論しなかったが、ブントのリーダーシップを否定した<sup>(21)</sup>。ブントと革共同も新左翼であり、新左翼は使う概念（記号）は、どの資料を分析しても、それほど変わらない。けれど、意味は共有した体験からしか発生しないので、体験された経験の違いによって実際に生まれる意味は変わる。だから、徐々に概念（記号）の説明は必要となり始めた<sup>(22)</sup>。

安保闘争高揚のときに世界プロレタリア革命という概念は、論文の上に意義があったが、体験された経験として意味はない概念に近かった。共産主義者同盟系の人々にとって、世界プロレタリア革命の意味は11月27日の経験から発生しはじめたのだらう<sup>(23)</sup>。意味の探求は翌年羽田闘争でも続いた<sup>(24)</sup>。1960年1月16日早朝から羽田には4000名の学生が結集し、激しい闘いが展開された。しかし、安保闘争の盛り上がりは5月19日（安保条約批准の強行採決）からであった。6月15日のデモで全学連の学生はもう一回国会の構内に突入した。機動隊の反撃で数百名は重軽傷をおい、樺美智子（22歳、共産主義者同盟メンバー）は撲殺された。16日から18日まで（強行採決された安保条約の自然成立）、南通用門での「樺美智子虐殺抗議、岸内閣打倒」の抗議集会を中心とした大規模なデモは展開された。

この15日の闘争は重要なリアル体験となり、新左翼が使う概念（記号）に変化をもたらした。ブントはこの体験から、樺美智子を記憶しながら、大学における新左翼の誕生を解釈し始めた<sup>(25)</sup>。浮かび上がった死んだメンバーの姿はエリート<sup>(26)</sup>のそれであり、「前衛」の意味は教養エリートという共有された体験から発生した。これに対して新左翼発生を語るときに使われる概念は安保闘争の経験、特に15日の闘いから解釈され、意味は闘争中に体験された経験から発生することになった<sup>(27)</sup>。重要な概念は大きく異なる二つの体験から発生することになった。ある概念は教養エリートとして体験された学問の世界から発生した<sup>(28)</sup>。その他の概念は物理的闘争という経験から発生した<sup>(29)</sup>。そのことが混乱をもたらした<sup>(30)</sup>、分裂を加速させたといえる。分裂寸前の

時「武装」という概念の意味は教養エリートとして体験された大学の世界から発生したということは興味深い<sup>(31)</sup>。

今回、非文字である文字という視点からの分析の試みはここまでであるが、大学紛争高揚期までの分析をまとめて、後ほど紹介していければ幸いである。

## 注

- (1) 戦いにおいて命令と報告のみから成り立っている言語を、人は容易に想像する事ができる。——或いは、問いと、それに対する肯定と否定の表現のみから成り立っている言語を。そしてその他の無数の言語を。——或る言語を想定する事は、或る生活の形式を想像することである。『哲学的探求』、19項目。
- (2) それでは、文にはどのくらいの種類があるのか？例えば、主張、疑問、命令などか？——そのような種類は無数にある：我々が「記号」、「語」、「文」と呼ぶものの全てには、無数に異なった種類の使用があるのである。そしてこの多様性は、固定したもの、断固として与えられたもの、ではない。言語の新しい形、新しい言語ゲームが、言うなければ生まれ、他の言語ゲームが廃れ、忘れられるのである。（この事についてのおおよその像は、無数の歴史が与えてくれる）  
「言語ゲーム」という語は、ここに於いては、言語を話すという事は人間の活動の一部分である、或いは、生活の形式の一部分である、ということを際立たせるためのものなのである。同、23項目。
- (3) 意味という語が用いられる——全ての場合ではないとしても——大多数の場合に於いて、人はその語をこう説明する事ができる：或る語の意味とは、言語ゲームに於けるその語の使用である。同、43項目。
- (4) さてそうすると、ここで本質的な事は、語を聞くと同じものが私の念頭に浮かぶとしても、しかし、その使用は場合によっては異なり得るという事を見て取る、という事なのである。しからば、語は夫々の場合に於いて同じ意味を持っているのか？私の信じるところによれば、我々は、その問いに対して、否定をもって答えるであろう。同、140項目。
- (5) 如何なる記号も、それだけでは、死んでいるように思われる。何が記号に命を与えるのか。——使用に於いて記号は生きる。使用に於いて記号は生命の息吹を持つのであろうか。——或いは、使用が記号の息吹なのであろうか。同、432項目。
- (6) しからば、如何にして語は感覚を指示するのか？——ここには何の問題もないように思われる。何故なら、我々は常日頃から感覚について語り、そして、感覚について名前を言っているのであるから。しかし、感覚

の名前とそれによって名づけられたものの結果は、如何にして確立されるのか？ この問題は、人間は感覚の名前の——例えば、「痛み」という語の——意味を如何にして学ぶのか、という問題と同じである。この問題に答える一つの可能性は、こうである：語が、感覚の根源的で自然な表現と結合され、そして、その表現の代わりに使われる。例えば、或る子供が怪我をして、泣き叫ぶ。そうすると、大人たちは子供に声をかけ、そして、まず子供に「痛い！」といった叫びの言葉を教え、後には「ここが痛い」といった文章を教える。大人たちは、その子供に、痛みの根源的で自然な表現の代わりに、「ここが痛い」といった言葉による新しい痛みの振舞を教えるのである。

〔それでは君は、「痛み」という語は実は根源的で自然な表現である泣き叫びを意味している、と言うのか？〕とんでもない。痛みの言語表現は、泣き叫びの代わりをするのであって、泣き叫びを記述するのではない。同、244 項目。

- (7) 私が私自身について、私は私自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するかを知るのだ、と言うとすれば、——私は他人についても、彼は彼自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するかを知るのだ、と言わねばならないのか？ そして、そうであるとすれば、如何にして私は一つの場合をそんなに無責任に一般化できるのか。

さて、人は皆自分自身についてこう語る：「私は、私自身の痛みからのみ、痛みの何たるかを知るのである！」——そこで、人は皆或る箱を持っている、としよう。その中には、我々が「かぶと虫」と呼ぶ或るものが入っているのである。しかし誰も他人のその箱の中を覗く事は出来ない。そして、皆、自分自身のかぶと虫を見る事によってのみ、かぶと虫の何たるかを知るのだ、と言うのである。——ここに於いて、人は皆夫々の箱の中に異なった物を持っている、という事も可能であろう。否、それどころか、箱の中の物は絶え間なく変化している、とう事する想像可能であろう。——さてしかし、このような人々に於ける「かぶと虫」という語が、それでも彼らに於いて、有効に使用されるとすれば、どうであろう？ ——そうであるとすれば、「かぶと虫」という語のその使用は、或るものの名前としての使用ではない。箱の中の物は、そもそも——或る物としてすら——その言語ゲームには属さないのである：何故なら、その箱は空っぽすらあり得るのであるから。——その言語ゲームは、箱の中の物を素通りする事によって、「短絡させられる」事が可能なのである。箱の中の物は、たとえそれが何であれ、無くされ得るのである。即ち、こうである：もし人が、感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモデルに従って構成するならば、その対象は、無関係なものとして言語ゲームの考察から抜け落ちるのである。同、293 項目。

- (8) 山口一理「十月革命の道とわれわれの道——国際共産主義運動の歴史的教訓——」『マルクス・レーニン主義』9号、1958年1月。このブントの原点である論文は、公然前衛党に対する党内闘争宣言であった。学生グループは、この論文を意図的に使い、本格的な党内闘争を開始した。

- (9) 過激なイスラム活動をある程度体験した人なら、次の文章から私が強調したいことがはっきり分かるだろう。

「四年間にわたる灼熱の太陽のもとで続けられたアルジェリア植民地革命は、現在の国際革命運動の鋭い焦点としてアラブ革命のなかにあって、もっともプロレタリア的、人民的性格をもって発展している」共産主義者同盟『全世界を獲得するために——プロレタリアート<sup>しょうび</sup>焦眉の課題——』1959年1月。

- (10) 「1920年代から30年代にかけての中国における、さらにまだドイツにおける共産主義者のおどろくべき裏切りの政策と敗北の歴史、フランス、スペインにおけるプロレタリアートの革命的闘争の苦い教訓を科学的な方法で理解するためには、われわれは全世界プロレタリアートの闘争の理論を基礎づけた偉大な10月革命の真実、その指導部隊の内部にあったドグマチズムとの闘争の経験にまで、どうしてもさかのぼらなければならないのである」山口一理、1958年。

恐らく学生にとって、引用されている歴史（疑似体験）の意味は実際に体験された六全協（日本共産党第6回全国協議会、1955年7月）や日共の方針転換から発生するだろう。「裏切りの政策」、「敗北の歴史」や「苦い教訓」などの意味は、リアル体験であった新左翼発生過程から発生したものだろう。

- (11) 「階級闘争を裏切り続けた後任の国際共産主義運動の指導部との思想的、理論的、政治的、断絶をあらゆる権威主義から解きはなて行くことなくしてはプロレタリア革命、共産主義の勝利はありえない!!」共産主義者同盟、1959年1月。

- (12) 「20回大会以後の党史研究の部分的成果の中でも「歴史学の諸問題」1956年8号のエ・エヌ・ブルジョアロフの論文「1917年3月～4月におけるポリシェヴィキの戦術について」は、最も大きな反響をよびおこした。それは、部分的で、かつなお実証的段階にとどまるものとはいえ、十月革命の途上において、ポリシェヴィキ党内にあらわれた戦術上の対立と混乱の時期の客観的分析の出発点をひらく大胆な問題提起として正しく評価されねばならないであろう」山口一理、1958年。

新左翼となる者にとって日共はもはや信頼や権威がない。何が主観的なのか、何が客観的なのか、正しく評価するというのは何なのかなどの決定はもう日共に委ねられない。個々の党派が自分自身で判断せざるを得なくなった。

- (13) 共産主義者同盟『全世界を獲得するために——プロレタリアート<sup>しょうび</sup>焦眉の課題——』1959年1月。



この論文は共産主義者同盟結成直後最初の政治論文である。既成左翼の理論に世界革命論を対置し、同盟結成の歴史的必然性とその根拠が論じられる。

- (14) 「かくて1959年は、プロレタリアートの解放にとって、世界プロレタリア革命にとっての一つの岐路となるであろうと同じように、このプロレタリアートを導くべき、意識された階級部隊が、いかに、58年に凝縮された「厳しい敗北」の教訓を、一世紀の共産主義運動の経験に照らして、獲得しつつ「実践的にもっとも断乎とした常に批准的な部分」であり、「理論的にもっともプロレタリア運動の条件、進行、および一般的結果への洞察力をもった」部隊としての自らを再生し、あるいは創設するか、否かの岐路となるであろう」共産主義者同盟、1959年1月。

「世界プロレタリア革命」などは疑似体験であり、意味はどのリアル体験から発生したかは推測しにくい。無意味な表現となっていたかもしれない。問題は理論上大切な役割を演じた概念だったということ。これに対して、「前衛党」の意味はエリートのリアル体験から発生したことは間違いない。

- (15) 『民主主義的言辞による資本主義への忠勤——国家独占資本主義段階における改良主義批判——』姫岡玲治（共産主義者同盟）、1959年6月。

この論文は第一次ブントを支えた「ブント＝姫岡理論」の主要部分を占め、レーニンの帝国主義論に対して国家独占資本主義論をもって第二帝国主義論を目指そうとした。

- (16) 「自己の特権を維持するためには、世界革命ではなく、現状維持の平和共存政策をとることによって、国際共産主義運動を毒す新たな日和見主義、改良主義の社会的支柱として役割を担うであろうことは、われわれはなんどか指摘してきたのであった」姫岡玲治、1959年6月。

当時「日和見主義」と「改良主義」の意味は独特な経験から発生して、日本共産党を批判する理論的な武器であった。時間がたつとともに体験されたものが変わり、重なり、「改良主義」と「日和見主義」が指すことは変わった。

- (17) 「国家独占資本主義論の究明にとりくまねばならない。だが、それをおこなうまえに、公認の日和見主義的前衛から分離し、組織上の独立を世界的に、反スターリン主義の左派反対派として実現している第四インターナショナルの方針について語らねばならない。偉大な革命家トロツキーの革命的伝統をうけつぎながらも、このインターナショナルは、今日ではもはや、来るべき世界革命を有効に遂行する革命的組織でなくなっている」姫岡玲治、1959年6月。

まだ「日和見主義」として批判されなかったということは興味深い。日本革命的共産主義者同盟は時間とともに「日和った」のではなく、意味の源泉である共有され

た体験が変わったので「日和見主義」の意味も変わっただけである。

- (18) 日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル）「11・27国会デモと労働者階級の任務——ブルジョアジー弾圧・組織破壊攻撃に防衛の闘いを組織せよ！——」『世界革命』号外、1959年11月28日。

ブントの全学連による11・27国会突入闘争は、あらゆる意味で衝撃的だったが、この闘いに対し、革共同はおおむね批判的であった。この論文は11・27国会突入闘争の翌日、革共同多数派（関西派）によって出された「声明」であり、安保闘争に対する一つの態度である。この論文でブントが「日和見主義」として批判されるころは興味深い。日本共産党を批判するために発生したこの概念の意味は変わり始めた。

- (19) 「11・27国会突入の偉大な闘いを記録した1959年は、あらゆる指導部の裏切りのうちにその幕を閉じ、今やわれわれの前には“労働者の15年か”“経営者の15年か”を決めるべき1960年がはじまろうとしている」

全学連書記局『残された日を羽田動員のために死力をつくせ』1960年1月8日。

- (20) 「だがかれらはこのために必要な正確な革命的戦略戦術を追求することを忘れて、尚議会議の幻想にとらわれている大衆（特に学生大衆）の気分におし流された」日本革命的共産主義者同盟、1959年11月28日。

論文中、最も重要な概念である「革命」の意味はリアル体験から発生したのだろうか。おそらくブントにとって「革命」の意味はリアル体験である国会突入事件から発生し始めた。しかし、革共同にとって「革命」はまだ空白の概念だっただろう。にもかかわらず、固定された意味をもつかのように（必要となる正確な革命的戦略戦術）利用される。

- (21) 「では全学連がこれを行ったのか？ 否!! これもまた大ウソである。これらの若い「左翼」は大衆の憤慨に押し流され、その上にのっかたに過ぎない。大衆の憤慨なくしてどうして彼らがこれをなし得ようか」日本革命的共産主義者同盟、1959年11月28日。

- (22) 「今や革命的プロレタリアートの任務は明白である。ブルジョアジーの攻撃に直面してプロレタリアートは先頭に立ってその陣地を死守せねばならない。「国会デモ事件」を口実にするブルジョア国家の一切の弾圧に対して実力（ストライキ）をもって講義し、阻止せよ」日本革命的共産主義者同盟、1959年11月28日。

- (23) 「11・27の闘いによって一時的ながらもそうした展望が開かれたにもかかわらず、12・10にわれわれが国会へ再度デモを行なうことに失敗したとき、……左への分裂を積極的に進める上で十分な闘いということは決してできなかったのであった。1・16の闘いを羽田実力阻止として実現することこそ、支配階級の攻撃をはねかえし、労働者階級の闘いを前進させる唯一の道である」全学連書記局、1960年1月8日。



- (24) 「1・16 羽田阻止闘争で支配者階級をせんりつせしめよ！」全学連書記局、1960 年 1 月 8 日。

「支配階級」という概念の意味はどのリアル体験から発生したのだろうか。学生として大学という経験からきているのか。激しい闘争（国会突入事件、羽田闘争）のときの「支配階級」の意味は警察との衝突から生じたものだろう。

- (25) 「プロレタリアの若き戦士——同志樺の死をいたむ——」共産主義者同盟、『戦旗』17 号、1960 年 6 月 21 日。

- (26) 「同志樺は、わが同盟が創立される以前から、すぐれたプロレタリア前衛の一人であった」「そして君を奪った敵権力への、限りなくしきりをもって、君のありし日の活動の日々を思う。君は衆衆には、おそれずに真理を語り、資本家階級への敵対の精神は、いかなる時にもかくそうとはしなかった」共産主義者同盟、1960 年 6 月 21 日。

- (27) 「日本共産党東大教養学部細胞にあって、彼女は、くさりきったスターリニズムにたいするはげしい闘争の中心的存在であり、そして学生衆衆の反帝闘争の惜しむことなき組織者であった」「全学連の拠点、東大文学部におけるスターリニズムの反革命を完全に粉碎したのである」共産主義者同盟、1960 年 6 月 21 日。

「はげしい闘争」の意味はどの体験を指しているかによって異なる。大学内のはげしい闘争という学問的な経験から発生する意味と、武装機動隊とのはげしい闘争という物理的な経験から発生する意味は、同じではない。「粉碎する」は何を指しているのだろうか。学問的な粉碎なのか。物理的な粉碎なのか。

- (28) プントは安保闘争の総括を耐えることができなかった。総括最中に出されたこの論文は同盟の再建や真の前衛の創設を議論するが、当時のプントは実際に分裂し始めていた。

「われわれはまず資本主義の矛盾を、その再生産の進展の困難として具体的に把握し、さらにその中での、プロレタリアートの反抗力の状態の具体的検討の上、機器のプロレタリア的決着、プロレタリア革命への展望とそのための戦術を語らねばならぬ」「とくに、学生運動内部での革命的インテリゲンチヤの内部からの深刻な闘争の結果として、ついに一切の既成の日和見主義から解放され、明確な階級的立場に基づいて、前衛の形成を準備する階級の組織的定着物として、わが同盟を生み出したのである」「同盟を真の前衛として再建せよ！——安保闘争の総括と同盟活動の展望——」共産主義者同盟政治局『戦旗』22 号、1960 年 7 月 26 日。

内部からの深刻な学問的な闘争の結果として、具体的な検討の上、庶民に学問や真理を語り、指導するということは、当時教養エリートの精神だったのではないだろうか。

- (29) 「たしかに生産点でのゼネストから、武装街頭デ

モ、そして叛乱、というほうが、無武装の街頭デモよりいいのはわかりきっている。しかし問題は、生産点ゼネストが、指導部の裏切りによって不可能だった時点にあって、いかに革命的學生運動と、労働者階級内部の少数の革命的分子によって進路をひらくか、という問題として立てられたのである」共産主義者同盟政治局、1960 年 7 月 26 日。

- (30) 「だが、この中でわれわれは、来るべき戦闘に同盟が準備する意義を明確にする必要がある。それは、プロレタリア運動の大衆的指導部として自らを成長させるということだけではなく、何よりも、プロレタリアートの階級的前衛として、終局的解放者として自らを準備するということである」。共産主義者同盟政治局、1960 年 7 月 26 日。

ある組織にとって成長するということは加入人数を増やすということだろう。この「成長させる」の意味は新左翼の発生、とくにプントの登場から発生したものだろう。「プロレタリアートの階級的前衛」と「終局的解放者」の意味は 1959 年 11 月 27 日（国会突入事件）、1960 年 1 月 16 日（羽田闘争）と 1960 年 6 月 15 日（最初の死者を出した日）の体験に由来するのだろう。

- (31) 「このような諸成果は、今後、真の前衛としての同盟の建設に、決定的な武器と資料を与えるものである。革命的思想と、明確な方針によって、全同盟が武装し、プロレタリアート内部で不屈の活動を続けるならば、必ずやわれわれは真の前衛としての実態をみずから作り出すであろう」共産主義者同盟政治局、1960 年 7 月 26 日。

## 参考文献

- 岩崎稔「砦の上にわれらの世界を」成田龍一、吉見俊哉編『20 世紀日本の思想』2002、37 頁、作品社
- 小熊英二『1968・叛乱の終焉とその遺産』2009、新曜社
- 児玉徳美「意味論の対象と方法」2002、くろしお出版
- 「言語学は分析対象をいかに拡大できるか——閉塞状況からの脱出に向けて——」2006、日本語用論学会第 3 回「談話会」より
- 三一書房編集『資料・戦後学生運動』（全 8 巻）、1968
- 新左翼論理全史編集委員会『新左翼理論全史』1979、流動出版
- ロベスハラ・サンティアゴ「戦後スペインと日本における学生運動のイメージ及びその比較（1970 年代迄）——服装から見るイメージの分析——」『年報 非文字資料研究』第 8 号、2012、神奈川大学非文字資料研究センター
- 三橋俊明『路上の全共闘 1968』2010、河出書房新社
- 山本明『戦後風俗史』1986、大阪書籍
- 和佐敦子『スペイン語と日本語のモダリティ——叙法とモダリティの接点——』2005、くろしお出版
- ヴィトゲンシュタイン『哲学的探求』読解訳・解説 黒崎宏 1994

- Ter Meulen, Alice G. B., "Formal methods in semantics", Maienborn, Von Heusinger and Portner (eds.), *Semantics. An international handbook of Natural Language Meaning*. Vol 1, 2011
- Rodriguez Maldonado; Antonio, "La interculturalidad oral en español. Un enfoque intercultural", *Actas de FIAPE. Segundo congreso internacional: Una lengua, muchas culturas*, Granada, 2007
- Tyler, Andrea and Takahashi, Hiroshi, "Metaphors and metonymies", Maienborn, Von Heusinger and Portner (eds.), *Semantics. An international handbook of Natural Language Meaning*. Vol 1, 2011
- Goddard, Cliff and Wierzbicka, Anna, "Semantic primes and cultural scripts in language learning and intercultural communication", In Gary Palmer and Farzad Sharifian (eds.), *Applied Cultural Linguistics: Implications for second language learning and intercultural communication*, Amsterdam: John Benjamins, 2007
- Engelberg, Stefan, "Lexical decomposition: Foundational issues", Maienborn, Von Heusinger and Portner (eds.), *Semantics. An international handbook of Natural Language Meaning*. Vol 1, 2011
- Kaul de Marlangeon, Silvia, "Perspectiva topológica de la descortesía verbal. Comparación entre algunas comunidades de práctica de descortesía del mundo hispanohablante", en Franca Goretti, Laura Mariottini (editoras), *(Des) cortesía*